

20-65

特 62 3788

276

ナ
4
323

軍歌集

1905

喇叭吹奏歌明洛十九年五月二十一日内務省贈付

第一號

君が代

千世よ八千世よ
さざれ石



いとほとなりて
まげのむすまで

第二號

○海ゆかえ

將官及相當官并ニ將官ノ職
ヲ奉スル大佐ニ對シ敬禮ヲ
表スルキニ用ユ

海ゆかば
みつくかばね
やまゆかは

くさむすかばね
おほ君のへよみそくなめ

のどよはりなり

第三號

軍隊相逢ノ時ニ用ユ

○皇御國

皇御國の武士ハ

いかなる事をもの勉むへ

唯身よもてる誠心を

わが大君よ盡すまで

第四號

靖國神社參拜等ニ用ユ

○國の鎮め

國の鎮めのみやうろと

いつきまつらふ神靈

けぬの祭りの賑ひを

天かけりてもとをなをせ

治まる御代を守りませ

第五號

一般葬禮ノ時ニ用ユ

○命をすて、

命を捨てて大丈夫か

とてし功績ハ天地の

在へき限り語りつさ

いひつとゆのむ後の世よ

絶せずつさト万世も

第二百十五號

分列式ノ時ニ用ユ

○扶桑歌

わが天皇の治めじる

わが日本の万世も

やほ万世も動かぬそ
治め玉へひとよとをよ
四方よ輝く御稜威ハ
斯るめてたき我國そ
天皇か恵よ酬いんと
盡せよや人力をも

第二百十八號

○あらさいはね

あらさいはねをぬみさくみ

神の御世より神ながら
動かぬ御代そ變らぬそ
月日の如く照すなり
やよ國民よ朝夕よ
心を合せひたふるお
合せて盡せ人々よ

登坂ノ時ニ用ユ

峻しき坂を越えゆくも

武士の身の常そか
いむらふ敵いむけあへつ
御心林めまへらせむ

第二百十九號

○あほ君の

あほ君の
いさを尊と一まつらわぬ
ひとをえやりてたひらけく
みらつかしき御軍の

習せや慣る君かため
販りて早く我君の
急げや急げ御軍は
歸營行進ノ時ニ用ユ

御稜威かよみんくさの
國をことむけちをやふる
かへるあもへん大君の
功績貴と一それみいつをや

そのさす笛

第二百二十號

葬禮ノ途上ニ用ニ

○ふみなす笛

ふみなす笛のその音も

捧る旗のその色も

もの、哀をいり顔に

けふはものごと哀しけれ

千百萬の敵軍も

とりて來ぬへき男らをと

おもへる我等の袖までも

涙の雨はぬれにけり

左の諸篇ハ吹奏歌の號中ハ非ずといへども
亦鼓勇の一助よもと今こゝは合せしるしぬ
軍歌

○第一

來^{きた} 進^{すす} や來^{きた}れい^いを來^{きた}れ
寄^よせ來^くる敵^{てき}ハ多^{おほ}くとも
死^しすとも退^{しりぞ}くとも勿^{なか}きを

御^み國^{くに}を^{まも}り守^{まも}れや諸^{もろ}共^{ども}よ
恐^{おそ}る、勿^{なか}れ恐^{おそ}る、な
御^み國^{くに}の爲^{ため}なり君^{きみ}のため

○第二

進^{すす}めや進^{すす}めい^いを進^{すす}め

彈^{たま}ハ霰^{あられ}と飛^とひ來^くるも

剣を林を爲すとしても
死すとも退くと勿れ

ためらふ事なく進み行け
御國の爲あり君のため

○第三

勇めや勇め皆勇め
御國を守る兵士の
死すとも退く事勿れ

劔も弾もなんのその
身ハ鐵よりも猶堅
御國の爲なり君のため

○第四

勉めよ勉め皆共よ
汚せしものそと後の世よ

汚し事なき國の名を
言れぬよろよと覺悟して

死すとも退くと勿れ

御國の爲なり君のため

○第五

懐いよ懐い能く懐ひ
我身の失せざる其中の
死すとも退くと勿れ

神より受けたる此國の
人手よ決りて渡さざと
御國の爲なり君のため

○第六

守れよ守れ皆守れ
恐るゝものハ父母の
死すとも退くと勿れ

異國の奴隸と成ることを
墳墓此國を能く守れ
御國の爲なり君のため

○第七

恐るへ勿れ 恐るへ
國を愛する兵ものよ
死すとも退くと勿れ

○第八

進めや進め 皆すめ
命を惜みす進み行け
死ばとも退くと勿れ

○第九

進めやすしめ 皆進め
進めやすしめ 皆進め
死すとも退くと勿き

拔刀隊の歌

○第一

吾れハ官軍我敵ハ
敵の大將たるものハ
是れよ従ふ兵ハ
鬼神に耻ぬ勇あるも

民を愛する我君と
勝つべきものハ世よ非ぞ

御國の爲なり君のため

腐りし心のあききものは
御國に旗を押し立て
御國の爲なり君のため

御國の旗を押し立て
祖先の國を守りつゝ
御國の爲なり君のため

天地容れざる朝敵そ
古今無双の英雄て
共に慄悍決死の士
天の許さぬ反逆を

起せり者ものの昔むかしより
敵てきの亡ほろぶる夫それれ迄までは
玉たま散ちる劍つるぎ拔ひき連つきて

○第二

皇國みくにの風ふうと武ぶ士しの
維新いしん以來このかた廢たれたる
亦また世よに出いづる身みの譽ほまれ
又またの下もとに死しぬへきよ
死しす可べき時ときの今いまなるぞ

榮さかへしとめし非あらざるぞ
進すすめやすしめ諸もろ共ともよ
死しする覺悟めくごて進すすむへし

其その身みを守まもる魂たましの
日本やまと刀ひたちの今いま更さらよ
敵てきも味方みかたも諸もろ共ともよ
日本魂やまとたましいあるものなり
人ひとよ後おくれて耻はぢかくな

敵てきの亡ほろぶる夫それれ迄までの
玉たま散ちる劍つるぎ拔ひき連つれて

○第三

前まへを望のぞめを劍つるぎなり
劍つるぎの山やまよ登のぼるの
此この世よよ於おつて面おものわたり
我われ身みのなせる罪業つみごころを
賊ぞくを征伐せいぼつするの爲ため
敵てきの亡ほろぶる夫それれ迄までの

すしめやすしめ諸もろ共ともよ
死しする覺悟めくごて進すすむへし

右みぎも左ひだりも皆みな劍つるぎ
未み來らいの事ことと聞ききつるよ
劍つるぎの山やまよ登のぼるの
滅ほろぼ爲ためよ非あらむとして
劍つるぎの山やまも何なにのその
すしめやすしめ諸もろ共ともよ

玉散る劔抜き連れて

○第四

劔の光閃く
四方よ打出す砲聲の
敵の刃よ伏す者や
絶て果がなく死する身の
其血の流れて川をなす
敵の亡ふる夫れ迄の
玉散る劔抜き連れて

死する覺悟てす、ひへし

雲間よ見ゆる電が
天よ轟く雷が
丸よ碎けて魂のをれ
屍の積みみて山をなす
死地よ入のも君れ爲め
は、めやす、め諸共よ
死する覺悟てす、ひへし

○第五

彈丸雨飛の間よも
進む我が身の野嵐よ
果のなき最後を逐くる共
死して甲斐ある者なれ
我と思えん人達の
敵の亡ふる夫迄は
玉散るつるぎ抜き連れて

○第六

二つ無き身を惜まばよ
吹のきて消ゆる白露の
忠義の爲めよ死する身の
死せるも更お恨なし
一歩も後へ引なれる
す、めやす、め諸共よ
死する覺悟てす、ひ可し

我^わを今^{いま}此^{こゝ}に死^しな^ん身^みの
捨^すつへ^へと者^{もの}の命^{いのち}なり
忠^{ちゆうぎ}義^ぎの爲^{ため}めよ死^しす身^みの
永^{なが}く傳^{つた}へて殘^{のこ}るらん
義^ぎもあ^き犬^{いぬ}と言^いはる、な
敵^{てき}の亡^{ほろ}ぶる夫^{それ}迄^{まで}
玉^{たま}散^ちる劔^{けん}杖^{ぼう}き連^れて

○行軍歌

我^わが日^ひ本^{もと}の國^{くに}体^{からだ}は

君^{きみ}の爲^{ため}めなり國^{くに}の爲^{ため}め
縱^{たご}令^へ屍^{かばね}の朽^くるとも
名^なは芳^{かぐ}ばしく后^{のち}の世^よに
武^ぶ士^しと生^うまれた甲^か斐^ひもなく
卑^ひ怯^き者^{もの}とと謗^{そら}れあ
す、めやす、め諸^{もろ}共^{ども}よ
死^しざる覺^{かく}悟^ごです、む可^かし

故^{ふる}き神^{かみ}代^よの頃^{ころ}よりも

神^{かみ}の御^み國^{くに}と稱^たへさ
遠^{とほ}き戒^{えい}夷^いが國^{くに}までも
躑^しすや草^{くさ}葉^はの露^{つゆ}程^{ほど}り
類^{たぐひ}も少^{すく}なき緒^{をた}環^{まき}の
守^{まも}るは誰^{たれ}の職^{つかさ}務^とや
置^おくの訓^{おし}戒^{へい}銘^{めい}肝^{かん}して
多^{おほ}聚^ほかる人^{ひと}の其^{その}中^{うち}も
厚^{あつ}き仁^に惠^{めぐみ}の駿^{そる}河^がなる
伊^い勢^せの海^{うみ}ぞら尙^なほ淺^{あさ}し

五^い百^{ひゃく}海^{うみ}坂^{さか}隔^かてた
光^{ひかり}輝^かく旭^{あさひ}子^この
侮^{あは}れ受^うけし例^{たと}めしたよ
盛^{さか}きぬ皇^{みかど}帝^{てい}の功^{いさ}績^{せき}を
誠^{まこと}實^{まこと}なる身^みハ甘^{あま}美^みにも
東^{つが}のあひたも忘^{わす}るなよ
醜^{しと}み御^み楯^{たて}と拔^は擻^られて
不^ふ二^じの高^{たか}峯^ねも尙^なほ低^{ひか}く
其^{その}皇^{すめらみ}よ若^{わか}しや又

寇なき我夷有るせむか
討ち夷けりて大君の

○進軍歌

彈丸の霞を空は飛び
雷の擬ふの砲聲はま
我魂の撃も打絶らん
進軍に猛き武士の
屍の野邊に曝すとも
櫻と匂ふ九段坂

陣脚事なきもあは
御一心 慰めも斎に人

陣や陣脚の対陣は
敵の野に遠望の電か
吹雪の來る風は陣
奪後の時を勇健に
陣脚の來る風は陣
各の居代へ 敵 腹筋しの
空の鳥の聲 陣脚の

北祭りの納豆の肉體靈の
寇なき我夷盡るはて
何為厭ふとん敷島の
堅固は堅硬き金剛の

忠人皆なるをて羨慕す
故郷の人よ品格高く

軍旗の歌

○第一
一千年百歳人以來

是は國の文珠の龜鑑と
假令や火の中水のそ
倭魂の飽くは
石より光輝灼々

青白なせる桐の章
錦織の飾るは

吾の陣言のしし
光の輝く大日本國

その國守る軍人よ
我大君の御標を
いかなる敵をも打攘へ

地球の上よ輝かせ
忠と勇とよ此旗を

○第二

昇る旭ともろともよ
汝を援け玉ふへ
此八洲國の内ならて

汝の仰く大旗を
君此御言をのりこみて
忠と勇とよ此旗を

いかなる寇をも打攘へ
地球の上よ輝かせ

代々の皇の神々へ
汝の功を立る場へ
外つ國々よ在りとしれ

神功皇后 豊太閤

忠と勇とよ此旗を

○第三

四方海なる日本國
未頼母敷金城ハ
我皇國よ寇を爲す
雷ちなせる大砲と
いかなる敵をも打攘へ

昔一の功績想へし

地球の上よ輝かせ

砲臺よりも眼よりも
汝等忠義の軍人そ
爪牙鋭き獅子逆も
兇者其の在るならば
電光あさむく劔さもて
忠と勇とよ此旗を

地球の土に輝く

雷をなせしる大旗

皇國の靈と軍人の

昔の矢槍方

汝の帯する銃

四式新なる日本國

此大御旗を推し立て

忠を再さる第五

我大君の御標

忠を再さる出旗

雷光のさびく旗

皇國の靈と軍人の

昔の銃砲軍艦

汝の帯する銃

四式新なる日本國

此大御旗を推し立て

忠を再さる第五

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

我大君の御標

猛く雄々しく平らげん

聖のよ安く在りし人の氣

其御神稜威朝さ宵いよ

海やに長かき安國を

仕へ奉ふ人民は潮

潮や増を増すよ眞心の

一つ心よ集めて

我日本を護りける

繼れ社を世に我國を

浦安國と稱へたれ

○復古の歌

○

西政復古のそのかみを

當るへは速く慶應の

時どせの冬の十二月

光日乃日をはりぬよ

新やみの雲よたちかへる

春のひかりもぬばたまの

世のかりととも乱れつ、○天英園新軍のあやめもわかぬぞみぞめの

鞍馬よひびくときの聲

よろひの袖よりがやくや

星のくらゐも三臺の

影うちすれぬくさしむしの

あかつき暗ら島羽伏見

大内山のやまがせよ

御の御旗ひるがへし

大將軍のいでまじよ

勇氣いやますますらをか

いくさよばおもさかすちよ

轟きたる修羅の道

斬りつ斬られは阿吽叫喚

ちしきよとむるもみぢばの

赤き火の力をとりどけよ

新れかたなるいぢはねつ

敵が身方々彼は離れ時

陣しださるゝ戰場の
 闘つひさしむのついの間の
 道のつてこそおぼれなれ
 峯のうまき定の城
 陣のすゝめおぼるふへ
 のどけさ春のうらみ
 陣たりつ、酔ひさか
 陣思ふ心むくさるの
 とれうとげこそ樂しけ
 出へはるゝつひの

○カムズベル氏英國海軍の歌

習ひ常なき、大地の身
 君をわすれぬも
 天地の神を
 おぼるる雲の
 秋をと海を
 秋の内油の
 熱たるみ
 よるひの

軍艦しるゝの第一

命より、國の海岸を
 初十年の異さ
 戦争のみか嵐をも
 敵を受くともたゆみなく
 軍烈しくも
 軍艦しるゝの第一
 立ちくる海の浪間よりの
 汝を援けたる

嵐も強く吹は吹け

國を守れを
 汝が建てる
 卒の得たれを
 勇氣の限が
 嵐も強く吹は吹け
 汝が祖先
 蓋し船先の

其甲板めてがらの場
大ネルソツやブレーキの

大津原の其墓場
死の所は人への

軍烈しくあらはなき

嵐も強く吹かば吹け

○第三

嵐も強く吹かば吹け

西方海なるブリクニヤ
山とたらくる波をても

嵐も強く吹かば吹け
中尋のなみの淵とせ

傾て我家の異あらは

嵐も強く吹かば吹け

船より放ち離れ

嵐も強く吹かば吹け

軍烈しくあらはなれ

嵐も強く吹かば吹け

○第四

○第五

國の光とたてし旗

毎夕光輝の輝き

危難も都て解け去りと

太平の日よもさるらん

其時汝つとももの

いさほし譽て諸人が

歌ふ唱ひて悦びて

安樂限りなるらん

烈しく軍すみみし時

強き嵐のやみし時

○テニソン氏輕騎隊進撃の歌

○第一

一里半なり一里半

並びて進む一里半

死地は乗り入る六百騎
士卒たる身の身を以て

將は掛懸れの市野中
譯を糾の分ならず

答をなせも分ならず
死ぬるの外はあらざらん

死ぬるの外はあらざらん
死地は乗り入る六百騎

其右を望めば大筒を
共の打出す砲撃の

共の打出す砲撃の
如く連撃す

如く連撃す
猛り立て進め

猛り立て進め
死地よこそ入れ

死地よこそ入れ
死地よこそ入れ

勇で乗り入る六百騎

勇で乗り入る六百騎

勇で乗り入る六百騎

勇で乗り入る六百騎

勇で乗り入る六百騎

勇で乗り入る六百騎

勇で乗り入る六百騎

勇で乗り入る六百騎

勇で乗り入る六百騎

皆認め人共の旗中

皆認め人共の旗中

皆認め人共の旗中

皆認め人共の旗中

皆認め人共の旗中

皆認め人共の旗中

皆認め人共の旗中

幾とていとどとていふなま

○第四

右き望めば大筒ぞ
共よ打出す砲聲の
彈丸雨飛の其中よ
死地より出て乗りかへす
歸るを元の一里半
残るのいとゞわづかあり

○第五

あゝ勇まゝさもれふの
手柄の永く傳へなん
とる年あまた重りて
頭よ霜を戴きて
六百人の豪傑が
そのふる事を語ろふて

左りも後も又筒ぞ
天よとゞろくいらつちぞ
縦横むづんよ切て靡
縛の口より脱れ出で
六百人の其中で

よよ香しき其譽
今のおよなと生立ちて
腰の梓の弓となり
孫ひこやしやと多き時
敵の陣にと乗り入れる
未代までも名は朽ト

○楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌

建武の昔し正成の
是ハ一歳都攻の有り一時

肌はだの守りを取て出し
下し給ひし繪旨なり

之これを汝なんぢよ讓ゆづるなり

我われれ兎とよ角かくよなるならば

世よの尊たみ氏の世うぢとなりて

獻あが慮りよを惱なやまし奉たてまつらん

鏡かがみよかけて見る如ごとし

さへ去あり乍まさら正まさ行つらよ

父ちちの子こなきは流なが石いしよも

忠ちゆう義ぎ此こゝ道みちへかねて知る

弓ゆみ張は月つき此こゝ影かげ暗くらく

家か名なを汚けがすまど勿なかを

打うち洩もらされし郎ろう等どうを

あわれみ扶たす助すけし隱ひそ家けの

吉よし野のの山やまの奥おく深ふかく

月つきの桂かつらの漣さざなや

流ながれも清きよき菊きく水すいの

旗はたを再またび翻ひるがへし

嗚あ呼い叙しよ慮りよを安やすんど奉たてまつれ

○小楠公を詠ずるの歌

嗚あ呼い正まさ成しげよ正まさ成しげよ

公こうの逝しよ去きよのまのかたへ

黒くろ雲くも四よ方ふかよふまがりにて

月つき日ひも爲なめよ光ひかりりま

惡あく魔まは天あま下かみを横たて行まり

下したを虐あげ上あをさへ

あなどり果はて上あとせず

吹ふき來くる風かぜはあまぐさく

絶たる間まのなき人じん馬ばの音ね

春はるへ來くる花はな咲さかす

芳たか野のの山やまよ花はな見みんと

訪たづね來きる人ひとへ絶たえてあ

君きみが御み代よこそ千ち代よくと

囀さへる鳥とりの聲こゑ聞きか

いつれの時にあつるなるや

嗚呼大君の御爲よ

この世の塵を拂はんと

遠くあなたを見わこせば

雲の上まで屹立し

見ゆる菊水の其旗の

父の賜ひしきの刀

賊の頭らを斬せむ爲

國の仇なり父のあだ

辨へて來たる夏の蟬

熟ら思ひめぐらせは

若しも病よ冒されて

不忠不孝と誅られむ

死出のなごりよ今一度

君は御影を伏し拜み

聞て切なる胸のうち

書き残りしる梓弓

誓ひし者へ百餘人

なげかわしきの至りなり

振ひ起りてけがれたる

する人どてをあらざるか

金剛山へ魏峨として

繁る林の木の間より

實にこそ國の寶なり

腹をされとの爲ならず

よくともあくし彼の賊等

斬て捨ばよ置べきか

元來よわき此からだ

空しく失せし事あは

討死するは此時ぞ

願かなへて親面たり

生て歸れのみことり

哀れといふも愚なり

引さてのへらぬ赤心を

雲霞の如き大軍を

ものともせずは斬まくり

君の方をば枕して

討死せしむるさぎよく

いさましかりける次第なり

都も遠き村里に

女をらべよ至まで

忠臣孝子の鑑ぞと

譽る其名は香しく

天地と共に傳はらん

天地と共に傳をらん

○詠史

武士の礎ともたへつゝ

其名かれせぬ楠の木

やまと心のくもりなく

君よつかへて國のため

をろ志の風よめたぎらば

たまりもあらずちりて

散行きよけりかの本の

いやつぎ一よろちよせて

又引かへ一攻め來れば

今をるざりよ死なばやと

心極めて櫻井の

里よかほれる言の葉を

子よ教つゝのまゝおき

其身はやがてつはものを

うちまけたがへて港川

そこをふかみて赤心よ

謀りし事もあるとあり

消て戦の敗れると

豫てかくぞと空よ満つ

倭心へ三吉野の

花と散てし憐れさを

早くも仇の傳へ聞き

暫時しばしばまどろむ夢をぞへ
心をつぎて君のため
家よ傳へしみたらしの
いるてふ事を記し置
實まことまたぐひなき丈夫ますぢの
國を枕よあしてける
傳へ聞くだよ身もさぶく

驚おどろがなんとむらきもの
盡す心えたゆみなく
粹あつの弓のなきうずよ
吉野の山のかほれるも
親子はらかならばらばも
赤き心を今も世に
なごよけるかなむわき丈夫

○日本魂やまとたましい

谷田部良吉

日本魂やまとたましい其そのの何なになる
外國ぐくに人の侮あなづりを
是これを日本の心なる
日本魂やまとたましい其そのの何なになる
樓もとび人逆さかも諸もろ共ともよ
是これを日本の心なる
日本魂やまとたましい其そのの何なになる
如何いかんなるよとの有ある逆さかも
是これを日本の心なる

寄せ來る歌を打拂へ
夢ゆめよも受るよとの無
是これを日本の心なる
築紫きしの端はてや陸奥むつに
偏ひとへよ盡つくを國の爲め
是これを日本の心なる
割われへ亡ほろひ合あへば立つ
心合こころあして割れざらむ
是これを日本の心なる

日本魂其の何を
力の有ん限りよ

人々勉め怠らす
國を開きて利を興す

是そ日本の心なる

是そ日本の心なる

日本魂其の何を

學ひの道を盛りよ

國よ無學の跡を絶ち

智識を以て名を揚る

是そ日本の心なる

是そ日本の心なる

日本魂其の何を

尊き人も卑人も

家の富めるも貧しきも

相親しみて解なし

是そ日本の心なる

是そ日本の心なる

日本魂其の何を

外國人を侮らす

道ある者と交るふ

彼と是との隔てなし

是そ日本の心なる

是る日本の心なる

日本魂其の何を

忠義心を堅く取り

信を盡す其の爲め

身を以て棄て、も動かす

是そ日本の心なる

是そ日本の心なる

日本魂其の何を

弱を扶けて強を撃ち

正しき道の及んで

無理非道を以てはさむ

是そ日本の心なる

是そ日本の心なる

日本魂其ハ何ぞ
幸なき者を憐^{あわれ}みて
慈悲^{じい}の心を擴^{ひろ}るめ
禽獸^{きんじゆう}よまで及^{およ}ばさむ
是ぞ日本の心なる
是ぞ日本の心なる

○熊谷直實曉^{あつ}よ敦盛^{あつもり}を追ふの歌

抑^{おさ}も熊谷直實^{くまがいひさね}は。征夷將軍^{せいゐしげん}頼朝^{よりやせ}公の御内^{ごうち}よ

關東^{くわんとう}一の旗頭^{はたかしら}。智勇兼備^{ちゆうけんひ}の大將^{たいしやう}と

世^よも知らせし勇士^{ゆうし}なり。左^{ひだり}れば元^{げん}暦^{れき}元年^{げんねん}の頃

源平須磨^{げんへいすま}の戦^{いくさ}ひよ。功名^{こうめい}あまじし物語^{ものがたり}り

聞^きくも中々^{ちゆうぢゆう}あわれなり。その時^{とき}平家^{へいけ}の武者^{むしゃ}一騎^{いつき}

沖^{おき}かる船^{ふね}に後^{あと}れしと。駒^{こま}を浪間^{なみま}よ打^{うち}入れて

一^{いつ}丁^{てい}許^{あふ}り進^{すす}みしを扇^{あふぎ}を揚^あげて呼^よび戻^もし

互^{たがひ}よしのぎを削^{けず}りしが。見^みれば二^{ふた}八^{はち}の御顔^{おんかほ}よ

花^{はな}も粧^{まう}ふ薄^{うす}化粧^{けいそう}。涅齒^{かぬくろく}黒^{くろ}々と附^つけ賜^{たま}ひ

斯^{いか}るやさしき打^う扮^{だんぱん}よ。君^{きみ}ハ如何^{いか}なる御方^{おんかた}ぞ

名^な乗り給^{たま}へと何^{なに}りけれバ下^{くだ}より御聲^{おんこゑ} 爽^{さわ}加^かよ

我^{われ}みそを參議^{さんぎ}經盛^{けいせい}の二男^{ふたご}。無官^{むくわん}は太夫^{たふ}敦盛^{あつもり}ぞ

早^{はや}々^々首^{くび}をうたれよと。西^{にし}よ向^{むか}ひて手^てを合^あせ

流石^{さすが}よたけき熊谷^{くまがや}も。我^{われ}が子^この事^{こと}まで思^{おも}ひやり

落つる涙なみだはと、まらず。鎧よろいの袖そでは絞しぼりつ、
 是非ぜいひなく太刀たちを振ふり揚あげて。南無阿彌陀佛なむあみだぶつの聲こゑもろ共ともよ
 首くびの前まへよど落ちよける。無残むざんや花はなの苔つばみさへ
 須磨すまの嵐あらしは散ちりよけり。之これを菩提ぼだいの種たねとして
 永々とと跡あとを吊まひ申まをさんと御みなき體からだよ言ことひ遺なごし
 青葉あおばの笛ふえを取添とへて。八島やしまの陣じんへ送りしは
 實みよなきけある武夫ぶつの。心こゝろの中なかぞあされなり
 その身みは遂ついにに蓮生れんじやうほうし法師ぼうしと名なのりつ、
 都みやこよ登のぼり元祖げんそ大師だいしを師し頼たのみ。剃髮ていはつせんい禪衣ぜんいの身みと成なて

晝夜念佛しゆげにんぶつ怠たらず。目出度めだつ往生おんじやうし給たまひけり

○月照僧げつてうの入水にすいをいたみて讀よめる歌

平野次郎國臣ひらのじらうくにん作

花はなは都みやこも秋あきは猶なほ。夕ゆふぬべ淋しみしき風情ふうせいなり
 名なは流ながれたる清水しみづや。落おち來きる瀧たきは乙羽山おつはやま
 秋あきは葉色はいろの溝みぞことよ。散ちるや紅葉もみぢのちりくと
 亂たふせゆく世よの浪花江なみのえや。蘆あしのさはりの繁さかくとも
 猶なほ世よのよめに身みをつとよ。盡つくくさんとても筑紫瀧つくしづたに
 波影なみかげの岸かたの沈しづならぬ。操あそびをいつか深緑ふかみどり

色を替らぬ青柳の。驛路を越て香椎瀉

た、の橋を打ち渡り。千代の松原千代のけて

萬代かけて君が世の。千十歳の松によろゑつ、

神よ歩を箱崎の。社にりけし四ツ文字の

筆の主をよく問へば。延喜の帝畏しこくも

御手をのり下りませりつ。爰もむがいは石疊み

重ぬくし白浪の。よせし昔し忘れがと

恨み浦半は片襟の。のけて歎くも憐きなり

沽衣塚の沽衣。吾が身よ着たる心地せり

やがて博多の假住居。こゝも浪風さばかしく

又行く方ハ薩摩瀉。沖の小嶋よあらねども

心細くも都よて。誰かあはきと思ふらん

たよるハ心筑紫瀉。一人の外に打あけて

語ふ人も浮き枕ら。波路へだて、野間の關屋の關守

よせきとめられて又舟よ

乗るも夫と寄あたま。波よゆられて行く先の

黒の瀬戸で名もさしや。頼て鹿兒島の島の鳥

つばと縮めて潜みじが。又木枯の風とおどるまで

日向を指して船出せし。日ひな神無月望なつつきの夜の

傾めだく月ともろ共よ。照りのがやまてくもりなき

身へ大君の爲ためよとて。爰こゝよ一人の薩摩瀉

いがある縁えんよし前の世よよ契あひかりも深き船の沖

底そこの藻屑もくせとなりぬるを。乗合人も船人も

櫓こぎは平ひらも露程つゆほども。さりとて知らぬ白浪しろなみの

立ちさへげとも甲斐あひぞなき。猶なほ東雲あづなの明け鴉からす

なくより外ほかのながりけり。さへもなみなり

二八〇 花月の歌 小室弘 作

月と花との昔より。誰が樂たのまぬ人ひとある

たがよるあけぬ人ひとあある。さへさりながら月花も

心こゝろよつきでうきまとの種たねともさきともさのらん

足柄山あしはらやまの風すごとく。松風まつかぜよそら簫しょうの音も

みれよと遠く奥州おくしゅうへ。いんとといわへ身みの末すえへ

死ぬしぬの生いひが白河しろかはの。關せきをは雲くもも隔へつらん

勿來なげの關せきの春はるのくれ。駒うまをとめて眺ながむれば

都みやこの空そらへ花はなやもり。鈴すずの袖そでも散ちのゝる

櫻の雪ハ將軍の鬢の霜より尙白ク
 戟の枕は夜の慣れて。秋のゐはれも知らざきぞ
 越山の月のいと白く。雲間を渡る雁が音も
 故郷の空にかへるぞと。思えば我もなほかた
 花の都のおきはて。何處が我身のおきどころ
 今宵一夜の宿頼む。櫻の露は袖ぬきて
 滅亡爰よきはまりて。平家の末を悲むけれ
 倭人むらの讒よより。諫めの言葉容れらさず
 二人ともなき賢臣の。筑紫の浦のわひ泣まひ

御衣を拜して涙なる。心の底ハ如何ならん
 我君今ハ賊のよめ遣は鳥も。行玉も
 無念の心やるせなく。十字を卜るす櫻の木
 我が赤心を申さん。杯か多言を要すんま
 月の光や花の香や。幾萬年を経るとても
 更みかわりのあきなるに。常なきものハ世の治亂
 月を見て酔ひ花を見て。睡れる春の手枕の
 只一場の夢の間。もうける興廢存亡の
 世のなかり行形無常きれ。若山も世運の拙なくて

上よひ君を煩はし。下よひ民に苦勞させ
 國の亂るゝその時を。月の光のりやくも
 花は色香のほほぬとも。なごたのしみゆゑるべきぞ
 されは世間のもろ人よ。今よりまをる引起
 國の光を東海の。月よりも尙輝めし
 國のほほきをみふりの。花よりも尙芳をし
 するよを今のうともあなり。誓て斯もなせ心後
 樂しき月をじて見こや。樂しき花をじて見こや

○玉の緒の歌の詞の賦曲并上 哲次郎譯

眠る心へしぬるなり。見ゆる形へおほゆなり
 あすをも知らぬ我命。あわきをかなき夢ぞかし
 などとあわれよいふり悪し。我命こそまことあれ
 我命こそたうかなれ。墓をちばりは場所ならず
 人は塵よて又散ると。いふかからたの上のこと
 人の願ひは喜びか。人れねがひの悲みか
 人の願へこれならぬ。唯怠らず働きて
 今日よりまさる明日をまで。業を久しく時の馳す
 強き胸だも亦たへず。鼓の如く打ちつこけ

一日くど近くなる。死出此旅をば速すなるあらず
 ひ多き世の中よ
 此身をよせてささかげに。なりてますく進むべし
 言なき啞となるなれ。牽ると牛となる勿れ
 如何よ未來の樂しきも。いかに空しき過去なるも
 ともよみきをば捨て置きてわれを忘きし神をりり
 をたらくべきは今日ほあり。ほぐれたる人世も多し
 我れとても人相同し。勉めをげめば斯くならん
 伽め怠らず務めなば。長く残さん此名をを

明治十九年
 五月七日御届
 同 月廿日出版

定價五錢

東京日本橋區
 馬喰町三丁目十九番地
 編輯兼出版人
 井上茂兵衛

學
堂
上
書
館
藏
書

車
馬
日
本
雜
記

張
家
口
五
日
十
八
日
記

張
家
口
雜
記

張
家
口
雜
記

072975-000-0

特62-276

軍歌集

井上 茂兵衛 / 編

M19

CEH-0513

